

# 白金霞

6月号



平成27年6月発行

第52号

白金葭定例会案内

月例会会報（'15 / 6 / 19 10名欠1）（グラジオラス、鮎）

七月十七日（金） 12:00 ~ 15:00 ア第一 兼題・鬼灯市、日盛

八月六日（木） 10:00 ~ 17:00 吟行句会（西新井大師↓炎天寺）

九月十八日（金） 12:00 ~ 15:00 ア第三 兼題・愁思、落鮎

鬼灯市、日盛の参考句（七月十七日分）

水を買うほおずき市のうら通り

鬼灯市や子規に恋の句あればなあ

鬼灯市夕風のたつところかな

炎立つ四万六千日の大香炉

鬼灯市雨あをあとと通りけり

よき人に逢ふは別れの鬼灯市

降りつゞき四万六千日となる

四万六千日水満々と隅田川

日盛りに蝶のふれ合ふ音すなり

日盛りの穴を覗きて鳴る耳輪

腰太き南部日盛農婦かな

正装の鴉が歩く日の盛

日盛や凌霄おごる松の上

日盛やおのが影追ふ蓬原

日ざかりや青杉こぞる山の峡

日盛やがんぎ伝ひに楽屋入

栗原節子

松田ひろむ

岸田稚魚

水原秋桜子

永田裕子

西谷義雄

富士子

高志

松瀬青々

吉田成子

成田千空

名久井清流

森鷗外

飯田蛇笏

芥川龍之介

中村七三郎

咲きのぼる十花一列グラジオラス

鮎の腸わたススル一献下戸デガス

江戸前の鮎の放流山深し

泣かすなよお下げ髪の子グラジオラス

天花粉まんづ噴水見舞はれし

増田陽一

昔日の吾も闇なり椎の花

梅雨晴間木更津谷地に竹乱れ

グラジオラス揺らさず通る神経科

潜る児の肢体も混り鮎の淵

湾岸に浅蛸口開く路線バス

光成高志

葭切の声聞く朝な夕なかな

グラジオラス島の畑の隅にかな

釣られたる鮎に交代四鮎

グラジオラスアクセントはどこ新教師  
縄張りを守り守りて鮎釣られ

光 みち

朝曇白鉢巻の祖母なりき  
聖書説く戸ごとふたつの白日傘

松村幸一

グラジオラス口尖らせて数ふ子よ  
川に立ち五体満足鮎を釣る  
鮎釣れて水に膝つき鮎外す  
水かかり驚きやすき蜥蜴の子  
もぢずりの見返り美人摘みにけり

吉羽多美子

ただ迅し流れも鮎もただ迅し  
水を抜くしぶきとなりて鮎釣らる  
桜桃忌今日とお菓子を食べながら  
共に鮎釣りし誰彼天に帰し  
帆が傾ぎ男傾がすヨットかな

武者昭七

鮎つりの日がな竿さす思ひ川  
咲きのぼるグラジオラスに明日をみる  
さくらんぼのこりのひとつ子にゆづり  
湯の宿にまづ箸のゆく鮎の皿  
糠雨にこもりらつきよう漬けにけり

倉田紀子

連嶺<sup>れんれい</sup>の白雪<sup>はくせつ</sup>はるか遅桜  
順番に下から咲いてくグラジオラス  
ほろ苦き味のうれしや鮎の腸<sup>わた</sup>  
天空の高みの花や朴の花  
とべら咲く岬の森や古社<sup>ふるやしろ</sup>(真鶴岬)

浅野正美

包丁の切れ味悪し朝曇  
漢方薬にほとほと倦みぬ夏の風邪  
手づかみの鮎少年の匂ひして

グラジオラス両手にかかえ友の来る  
菖蒲園木札にするす源氏の名  
枇杷うれて鳥に食べ頃教えられ

グラジオオラス花つぎつぎと咲きのぼる  
鮎の稚魚びちびち跳ねて放たれる

青木啓泰

それぞれに鮎釣り装束締めりおり  
鮎焼いてランチタイムの道の駅  
春雷や少年直立して尿る  
水郷の麦秋モヒガン刈りのよう  
田の神はいつ来て帰る蟾蜍

佐藤宏之助

早苗束抛る筑波の峯に向け  
神輿振るここは昔の処刑場  
雨に濡れグラジオオラスは恋の花  
口中にとろりと苦み鮎の腸  
寝溜してこれより梅雨の俳句会  
振花の螺旋に雨滴連珠なす

選句結果（数字は入選数 左添書きは添削句）

4 早苗束抛る筑波の峯に向け

宏之助

4	包丁の切れ味悪し朝曇	紀子
4	もぢずりの見返り美人摘みにけり	みち
3	春雷や少年直立して尿る	啓泰
3	ただ迅し流れも鮎もただ迅し	幸一
3	咲きのぼる十花一列グラジオオラス	孝三
3	糠雨にこもりらつきよう漬けにけり	多美子
3	鮎つりの日がな竿さす思ひ川	〃
2	天空の高みの花や朴の花	昭七
2	グラジオオラス両手にかかえ友の来る	正美
2	縄張りを守り守りて鮎釣られ	高志
2	グラジオオラス島の畑の隅にかな	〃
2	水を抜くしぶきとなりて鮎釣らる	幸一
2	漢方薬 <sup>かんぽう</sup> にほとほと倦みぬ夏の風邪	紀子
2	漢方薬にほとほと倦みぬ夏の風邪	〃
2	水かき驚きやすき蜥蜴の子	みち
2	菖蒲園木札にするす源氏の名	正美
2	咲きのぼるグラジオオラスに明日をみる	多美子
2	昔日の吾も闇なり椎の花	陽一
2	桜桃忌今日とお菓子を食べながら	幸一
2	田の神はいつ来て帰る蟾蜍	啓泰
2	手づかみの鮎少年の匂ひして	紀子
2	さくらんぼのこりのひとつ子にゆづり	多美子
1	葭切の声聞く朝な夕なかな	高志

1 鮎の腸わたススル一献下戸デガス 孝三

1 ほろ苦き味のうれしや鮎の腸わた 昭七

1 鮎釣れて水に膝つき鮎外す みち

1 鮎の稚魚びちびち跳ねて放たれる 正美

1 それぞれに鮎釣り装束締めりおり 啓泰

1 それぞれに鮎釣り装束締めりをり 昭七

1 順番に下から咲いてくグラジオラス みち

1 川に立ち五体満足鮎を釣る 紀子

1 朝曇白鉢巻の祖母なりき 高志

1 グラジオラスアクセントはどこ新教師 昭七

1 連嶺れんれいの白雪はくせつはるか遅桜（信州伊那谷） 幸一

1 共に鮎釣りし誰彼天に帰し 宏之助

1 神輿振るここは昔の処刑場 孝三

1 江戸前の鮎の放流山深し 多美子

1 湯の宿にまづ箸のゆく鮎の皿 紀子

1 聖書説く戸ごとふたつの白日傘 孝三

1 泣かすなよお下げ髪の子グラジオラス 啓泰

1 水郷の麦秋モヒガン刈りのよう 陽一

1 湾岸に浅蜷口開く路線バス 宏之助

1 雨に濡れグラジオラスは恋の花 陽一

1 梅雨晴間木更津谷地に竹乱れ 正美

1 枇杷うれて鳥に食べ頃教えられ

グラジオラス揺らさず通る神経科 陽一

鮎焼いてランチタイムの道の駅 啓泰

口中にとろりと苦み鮎の腸 宏之助

帆が傾ぎ男傾がすヨットかな 幸一

グラジオラス花つぎつぎと咲きのぼる 正美

天花粉まんづ噴水見舞はれし 孝三

寝溜してこれより梅雨の俳句会 宏之助

釣られたる鮎に交代囀 高志

グラジオラス口尖らせて数ふ子よ みち

潜る児の肢体も混り鮎の淵 陽一

振花の螺旋に雨滴連珠なす 宏之助

とべら咲く岬の森や古社ふるやしろ（真鶴岬） 昭七

## 一句鑑賞

浅野正美

江戸前の鮎の放流山深し 孝三

先日TV放映で多摩川に鮎の稚魚が遡上してくることを知りました。私は東京都大田区で生まれ育ちましたので、多摩川は身近に感じます。高度成長時代の汚染された川を思い出すと隔世の感があります。川に設けられた堰を越えられない稚魚の為に捕獲し上流まで車で運び放流する映像でした。私は元気に放流される姿を「鮎の稚魚びちびち跳ねて放たれる」と句にしましたが、掲句は東京湾から多摩川に遡上し、新緑に囲まれた上流までの

空間を感じ、稚魚が藻を食し、成長する姿まで想像できません。作句に感じ入ると共に、句を作ろうと見つめることは単なる観察ではない“と大変勉強になりました。

追伸・みち様 グラジオラスとラベンダーありがとうございました。部屋が明るく感じます。

### 一句鑑賞

倉田紀子

糠雨にこもりらつきよう漬けにけり

多美子

作者とは、長いお付き合いをして頂いている。地域のボランティアで、お弁当作りのチーフを長年つとめていた事もあり、特にお料理は得意なのだ。私が夕食の献立に思案していると、温かいお裾分けが届き、本当に助けていた。この所、梅雨とは云え降りみ降らずみの様子が続いている。そんな日、主婦は家仕事に専念する。飴色になった辣蕪を食べる家族の顔を思い出しながら、保存食を作る。透明な広口瓶には、辣蕪と鷹の爪が踊る。美しい！酢の香にまみれてふと気がつくともう夕暮れがきている。読み手は、薄くらやみの台所の白い辣蕪や梅雨どきの甘酢の香りそして、母や妻を連想する事と思う。季語は動かず、糠雨を上五に置き、句に一層の重み厚みが加わった。大好きな句である。

### 一句鑑賞

光成高志

ただ迅し流れも鮎もただ迅し

幸一

今回、鮎の兼題を出しておいて、鮎や鮎釣りを知らずして作句するのはまずいと思い、酒匂川の鮎釣り現場を取材した。掲句の通りの情景を見た。水の流れが速く、見えなかったけれども鮎も水中を迅速に上っているに違いないと思い、言葉の運びも迅速であり、こういう句は、句にはしりがある佳句と思い選句した。くり返し詞がくどくないのは、遠くから見ても、速いなあとという見立て、近くに来て流れも鮎もほんとに速いなあとという感動が経時的に陳べられているからである。タダバヤシナガレモアユモタダバヤシと一気に読め、母音のア音が11音もあって、天上の紺の下、川瀬の波の凹凸まで想像させる力がある。これは相当いい句だと思う。

水を抜くしづきとなりて鮎釣らる

幸一

鮎を釣り上げる瞬間こうなる。私が見たのは、しづきと共に鮎が光ることであった。四鮎も一緒に手許まで寄せられて来る。もつとも水を抜かず水中を寄せて水中で針を外すのかも知れない。鮎釣りのダイナミックな動きが目に見えるようである。

鮎釣れて水に膝つき鮎外す

みち

これも鮎が釣れた時の動作を正確に書いてある。写生

だけでは単なる絵であり、面白くないという見方があるが、それは短絡的見方である。大勢の釣人が川中に立って竿を動かしている中に川底に膝をつけてしゃがんでいる釣人は釣果を外している喜びの中にいるのだ。見てゐる作者も喜んでゐるのだ。総じて鮎釣りは、寒鮎つりのようなのんびりした釣ではなく、目も手も足も常に動かして鮎の動きを想像して鮎と神経戦を挑んでいる一種のゲームである。

## 一句鑑賞

武者昭七

### 早苗束抛る筑波の峯に向け

宏之助

まばゆいばかりの五月晴れだ。目の前に筑波山がそびえたつ。今日は一家総出の田植だ。苗は手渡しでは間にあわない。筑波山に向かって力いっぱい放り投げるや空を切る早苗束を受け止めて素早く植え込んでいく。見る間に広がっていく青い苗の列。今は消えてしまった農村風景が懐かしい。

### 縄張りを守り守りて鮎釣られ

高志

鮎は縄張り意識が強い。人間はその習性を逆手にとって鮎をせしめる方法を考えた。友釣りである。ずるいのだ。「守り守り」と重ねたところに鮎の懸命さを、「つられ」にそれゆえの悲劇をとらえてみせた。作者は鮎に同情しているのである。ユーモアとペーソスがにじむ。

### 昔日の吾も闇なり椎の花

陽一

椎はうっそうとした大木となり初夏には旺盛な葉を茂らせ香りの強い黄身がかった小花をつける。大木になるだけにその下は深い木下闇となる。作者はその闇に自身の青春を重ねて昔の自分もこのようであったと回想する。青春は夢や光明にばかり溢れてはいない。光の部分が輝かしいだけにそれが抱える闇もまた深いのである。作者はそれをみつめている。

### もぢずりの見返り美人摘みにけり

みち

もぢずりは野原などにもよく見かける可憐な野の花。茎に身をよじるように螺旋形に花をつけるので「ねじバナ」ともいう。「見返り美人」は有名な菱川師宣の肉筆浮世絵。切手にもなった。可憐な野の花に豊麗な女性の絵姿を見たところが美的な感覚の冴えである。

### 手づかみの鮎少年の匂ひして

紀子

「匂ひ」は臭覚に訴えるものだけをいうのではない。色艶のあざやかに花やぐさまをいうのがもとともらしい。山桜の美を「朝日に匂ふ」などと言っている。だから、「少年の匂ひ」とは少年の身が放つしなやかな美しさというと思いたい。手づかみした鮎が伝えてよこすはりつめた感触に少年の肢体だけが持つ弾みとはなやぎを感じたのだ。

## 一句鑑賞

飯田孝三

糠雨にこもりらつきよう漬けにけり

多美子

時は梅雨、糠雨がふりつづき鬱陶しい。出歩くのも面倒、そうだ、いまのうちに辣蕪を漬けよう。髭のような根毛を切り、洗い、薄皮を剥いて漬ける。思いの外手間隙かかるのだが、洗い立ての白さ目を射る実（錘形の鱗茎）が、特有の匂いと相まって梅雨の鬱気を吹きはらう。終辞「けり」の外連なさがそれを語る。

春雷や少年直立して尿る

啓泰

春雷は啓蟄の頃に初めて鳴る雷。夏のそれと違って激しきはなく、一つ二つで止むことが多い。天に兆す春氣胎動のひびきを運ぶ。配する「直立して」が面白い。ご存知、ブリュセル生れの小便小僧の氣張り腰ならぬ、直立不動の姿勢なるべし。「春の雷湯殿に帯を解きおれば」（真砂女）「春の雷弱音を吐いて失せにけり」（立原道夫）。別に「田の神はいつ来て帰る蟾蜍」、「蟾蜍」の字面が絶品、面構えそっくり。御田大御神様に在すや。んにや、名代小田守蟾蜍命にぐわす。これはこれは御大役、御大義御大義。

包丁の切れ味悪し朝曇

紀子

互選最高点の一つ。初め、〴〵朝「曇」に引っぱられ、〴〵切れ味「悪し」はつき過ぎと感じ、互選ではとれなな

った。互選評を聞くうちに不明に気づく。「朝曇」は、朝、靄をかぶったように曇る夏の氣象。それも朝のうちだけ、大抵はすぐに好晴となる。いわばその天然の機微に感じる一句なのである。「悪し」の切れのよさは、これも朝曇の特徴、昼頃から急に暑くなる氣韻と交響するではないか。

神輿振るここは昔の処刑場

宏之助

千住大橋際の西南、奥の細道矢立初めの碑を置く、芭蕉縁の素戔雄神社の例祭である。神輿は、通称「二天棒」で早く、揉むではなく、振る。神前を通る旧日光・奥州道（通称「コツ通り」）を南へ勇壮に振り、左折すれば小塚原回向院。「振る」は、斬首の白刃の閃きにも通い、ふつと往時の荒涼の氣を想像させるのである。

川に立ち五体満足鮎を釣る

みち

「五体満足」は身体どこも欠け損じないこと、健常体。「鮎を釣る」は友釣りだろう。ときには腰の上まで川水に浸かる、知命を過ぎた身には厳しい。それを厭わぬ丈夫な体を授けてくれた双親がいまさらに有り難い。同僚、朋輩らは、次々、鬼籍に入る。他言無用、慣用の成句に語らせ余すない。脱帽。他に「もぢずりの見返り美人摘みにけり」、一読、「見返り美人図」（菱川師宣）の遊女が忽然と立ち現れる。ふうむ、「もぢずり」の風情は、げに件の美女を連想させる。可憐な花のよじりが艶<sup>あで</sup>な身の



振り。むべ、捻花はつまみ心を揺りさます。ゝ「けり」の切り上げが粹である。

### 釣られたる鮎に交代囎鮎

高志

鮎の友釣り、鮎の習性を利用した漁法である。掛針をつけた生きた鮎を囎として放し、縄張り荒しと思ひこみ挑んでくる鮎をひっかけて釣る。縄張りの苦はもとより命の綱、生への執着が仇となり、悲運、捕えられる。片や囎鮎、ひきつづく応戦に疲労困憊、釣り上げられたばかりの鮎と入れ替わる。さて囎鮎のその後は・・・、新たな囎も同じ運命を辿るのだ。万物の霊長とうそぶく人間は、なんとも身勝手で残酷。交「替」ならぬ交「代」が常用を離れて重い。外に「グラジオラスのアクセントはどこ新教師」、昭和の青春ユウモア小説の場面を思わせる。「新教師」は新任の青年教師。生徒諸君いや諸姉かな、茶目っ気も過ぎてはいけませぬぞ。「グラジオラス」の口調の奇妙に着目した一句。作者は英語のできる勉強家。順番に下から咲いてくグラジオラス

昭七

有態に平談し、口語調ならではの俳味が滲む。グラジオラスの音調・音色がこれに添い、しゃかりきの句では得られぬ面白さがある。初っ端の「順番に」がいい。臍である。余談だが、日頃、散歩する公園で、幼稚園児たちが滑台の横に並び、順番を待っているのをよく見かける、と、腕白な闖入者が現れ、みんな「順番」、「順番」

と従わせる。ほほ笑ましい。互選、宏之助さんの目利きぶりに敬服。

### 一句鑑賞

増田陽一

### 田の神はいつ来て帰る蟾蜍

啓泰

神殿をもたない「田の神」は、田打ち、田植え、さなぶり、など稲作儀礼に応じて迎えられ、送られるのだそうである。蟾蜍が水に入るのはただ交尾、産卵の時だけで、やはり田の神を氣にしている。できれば人間が豊作を祈るのにあやかっ、蛙も子孫繁栄を願いたいのである。否否、蟾蜍の方が土地の神とは付き合いが古く、人間の歴史以前の顔見知りである。など蛙の方ではないかもしれない。「蟾蜍」の文字の重々しさがよくあっているようだ。

### 鮎つりの日がな竿さす思ひ川

多美子

解禁になったらこの川で鮎を釣つてやろう、と念願していた想いの川でもあらう。終日、流れに半身浸つていて飽きない。「日がな竿さす思ひ川」との表現の滑らかさ。「思ひ川」の名は各所にあるけれど近くは筑波に行く途中にあったのを思い出した。

### 川に立ち五体満足鮎を釣る

みち

急流に身を冷しながら佇立して鮎を釣る姿を見て作者は「あの五体満足そうなことよ」と感じたのである。何

という健康で明るい想念であることか、と、読んでいて愉快になる。

### ただ迅速し流れも鮎もただ迅速し

幸一

急流に鮎の踊る姿だけに絞って、早いリズムの音楽のように情景を捉えた手腕が素晴らしい。鮎ではないけれどシューベルトの『鱒』が聞こえてきそうである。

### 縄張りを守り守りて鮎釣られ

高志

川の中の石に生える苔を食べる鮎にはそれぞれ縄張りがあり、他の鮎が接近すると激しく体当たりして追い払おうとする。この習性を利用するのが友釣りで、本能が人間の狡知に利用されるのである。掲句にはその鮎への同情がある。テリトリーを守る本能は可憐な蝶にさえあって、オオムラサキ程になると小鳥さえ追い払おうとするのである。

### とべら咲く岬の森や古社（真鶴岬）

昭七

真鶴岬は3キロほどの小さい岬ながら見どころが多く、暖地性の樹木の茂りで独特の生態系がある。掲句は「とべら咲く」と、林中に朽ちて行く古社でその風情を表現している。古社は貴船神社か。「とべら咲き沖曇りくる水族館 白葉女」の句も、この岬かな、と思う。

### 朝曇白鉢巻の祖母なりき

紀子

鉢巻として家霊のような重みのある祖母、という存在も珍しくなった。白鉢巻、というと薙刀でも振りそうで

あるけれど、「朝曇」が微妙で、暑さの襲来に備えて身を引き締めたのか。「いつも二階に肌ぬぎの祖母ゐるかたは飯島春子」という不思議な句もある。こちらは作者の曾祖母で夏は肌脱ぎで晩酌した明治の女、今、多くの女性とは若作り志向でありこのような『実存的老婆』も居なくなつた。

### 一句鑑賞―第50号―

増田陽一

### 相似たりモーツアルトの髪と薔薇

みち

戦前、小学校の音楽教室に並んでいた『楽聖』の肖像画はヘンデル、バッハ、から始まり、古の巨匠たちは髪形まで堂々として居たが、あれは鬘であつただろう。ベートーヴェンは蓬髪で印象的であつた。モーツアルトはどうだったか思い出せないけれど、美しい音楽を続々と生んだ天才の髪ならば薔薇と競う、というのは成程、と思う着想である。列伝に付け足しのように若い滝廉太郎の顔がひとつあつたりして、何だか西洋文化の威厳を感じさせたものだった。

### 山つつじ駅長客と顔なじみ

多美子

「駅長」と「顔なじみ」の取り合わせが小駅のある地域の心安さ、懐かしさを伝えて絶妙である。勝手な連想を許して頂けるなら、これは僕にとって御岳山のケーブル駅そのものである。山の躑躅の咲くころが素晴らしい季

節で、花に来るミヤマカラスアゲハを採り、溪で鳴くコルリの声を聞き、宿坊の庭でクマガイソウの花を見たりした。駅近くには山門や茶屋の人たちなど麓と行き来する住人も多く、掲句通りの雰囲気である。ついでに書く、山を降りて行くと溪流を見下ろす酒場『ままごと屋』のテラスがあり、悦子と何度か飲みに行ったな、などと思いついて誘ってくれた句でありました。

### 花びらの重なり捲れ薔薇開花

高志

薔薇の花弁の重なりを即物的に言いとめた句であろう。即物的と言えば「捲れ」の措辞は山口誓子の『富士火口肉がめくれて八蓮華』の肉感のある描写に一寸似ていて、生々しく開花の動きを表現している。

### 築地はも今年限りの初鯉

孝三

築地の魚市場も古くなり移転の時が来ているという。「初鯉」は江戸っ子の粋の見せどころであつたけれど、その伝統も遠くなつたという嘆きのごとくである。『築地はも』の語調にその嘆きが感じられる。

### 五月人形綿を噴きたる鯉抱いて

幸一

鯉を抱いた五月人形は金太郎さんか。人形が古くなつて鯉のぬいぐるみから詰め物の綿が噴き出したところ。人形飾りには家族の歴史がある。息子さんの誕生のお祝いに贈られたのか、それ位の古さが似合いそうである。人形の傷みを見ていると過ぎ去つた歳月の感慨が迫つて

くるのである。

### 忠魂碑比島に果つと花の雨

昭七

忠魂碑というものを最近みないけれど、これには「陸軍何等兵何の某。フィリッピン、ルソン島にて名譽の戦死」何とかと言うような銘が刻まれて居たに違いない。『万葉の櫻か襟の色、花は吉野に嵐吹く、大和男児と生まれなば、散兵線の花と散れ』『尺余も銃は武器ならず、寸余の剣何かせむ、知らずやここに二千年、鍛へ鍛へし大和魂』と、何ともひどい陸軍の歌であつた。こんなに調子よくナンセンスな歌に乗せられて死んではたまらない。散つて行く花に、雨は涙を絞るように降っている。

### 苗売りのお店の帳場座敷にある

啓泰

野外にある店ではなく農家の土間で、その畑で育てた苗を頒けているのであろう。「座敷に帳場がある」ことに着目しただけで、和紙を閉じた毛筆書きの帳簿のあるような、地方の旧家らしいようすが目に浮ぶ。

### ハガキ句(51報) 管見

飯田孝三

### 関伽井あり桜落葉の堆く

高志

関伽井は仏前に供える水を汲む井戸。周りに桜の落葉が堆く積もっている。「さ」は、さなえ、さをとめ、さつきに通じ、「くら」は、かみくら(神座)、いわくら(磐座)のそれ。即ち、桜の名は穀霊の意とか。万葉の昔か

ら詠われ、又、現代の作家、詩人にも桜を主題とする作品が多くある。関伽井の佇まいと桜落葉の色彩が対照的。「堆く」が眼目。桜の美しさ、はかなさ、ときに潔さを愛で、称える、「桜の精神史、文化史」上の所論の嵩みを象徴する如くである。蔵するところが深い。ともあれ、桜の美を嘆え、散るを惜しむのは、変わらぬ、日本人の

ハガキ句五十一報 (09/12/1)

小走りに下駄音帰る石路の花(一葉忌) 孝三

枯蓮の釘、銚<sup>かすがい</sup>や遠きアラブ 陽一

寸も位置捨冬瓜の変らざる ひろし

寿命てふ不思議な月日冬霞 虎童子

山中に仏彫る音冬ぬくし 羊三

聖書説くこゑ頭上より街師走 華空子

美少女が一人降りたり雪の駅 圓子

風花のうつらうつらとごぼう抜き 啓泰

駅弁の蓋の飯つぶ冬日和 かづひろ

枯山に侏儒の乾きし笑ひ声 璃子

地下足袋の足を投げ出す小春かな 敏子

関伽井あり桜落葉の堆く 高志

「ここ」だ  
う。  
「あ  
の  
れが  
懐を  
める。  
山に  
儒の  
きし  
ひ声  
子  
枯山  
侏儒  
ちの  
咲笑が

カラカラと響く。雲一片おかぬ晴天である。ふむ、侏儒は枯山の精だったか。「枯山」と「乾きし」は類義重複すると思うなら、理屈の虜囚たる証。収斂しつき抜け、枯山の本然に到れるを知るべし。能の玄妙と西洋お伽話の不思議をつき混ぜたようだ。面白い。又、リズムがいい。i音の反復、なかんづく上五下五の脚韻iの踏韻は、氣韻透徹。「やまに」、「かわき」、「わらい」のa a i音の畳みかけが開放感を高め、結「ごゑ」で明るく和んで収まる。「かれやま」、「かわきし」のk音の効果については、いわずもがな。ただ、一抹、筒抜けの淋しさがある。「ごゑ」は鼻濁音。

KaReYaMaNiS yu ZyUNoKaWaKiShiWaRa iGoe

枯蓮の釘、銚や遠きアラブ 陽一

立枯れ、折れ曲がった蓮の茎は釘、銚の形だ。釘、銚に建材を繋ぎ合わせ、固定するもの。作者は、戦禍絶えぬアラブの地に思いを馳せ、平和の到来を祈る。「遠き」は距離・空間の隔たりであり、混迷の深さだ。「遠き」が臍。

地下足袋の足を投げ出す小春かな 敏子

自家栽培農園での一コマ。夫婦協働の作業一巡、さあ、一服しよ。ほのかに汗きざす疲れが快い。小春まぎれなし。「かな」が晴れやかで微笑ましい。

## 駅弁の蓋の飯つぶ冬日和

かづひろ

飯粒の一粒、一粒がいのちの糧。昭和の子供たちは、飯は一粒残さず食べなさいと躰られた。でないと、お天道様の罰が当たると。「冬日和」がしみじみ有り難い。「冬日和」の幹旋が手練。出張の車中吟だろうか。

## 山中に仏彫る音冬ぬくし

羊三

山中に仏彫る音を聞く。気忙しい都会生活者は、瞬間、ふつと吾にかえる。「冬ぬくし」の安堵感がなつかしい。上五下五「しに」、「し」の脚韻i音の踏韻がその思いを深める。

## 寿命てふ不思議な月日冬霞

虎童子

「冬霞」は、越し方を振り返る茫々の歲月だろうか。「月日」は「冬霞」につらなる縁語。

## 寸も位置捨冬瓜の変らざる

ひろし

捨城、捨扇、捨石、捨鉢などは聞くが、捨冬瓜は知らない。生硬ではないか。下五上五の倒置を含む調べ全体が佶屈だが、敢えてそうしているのだろう。自嘲、超然の態を詠う。

## (俳句雑信)

高志さんの「閑伽井あり」にたいへん感銘しました。精神性が濃く、ふところ深い。その他も、さすがにいい句ばかりで、読み手冥利に尽きました。こちらは一向にうだつがあがらずじまい。今年も暮、無常迅速を肌身に

するばかりです。ご夫妻ともども、ご自愛のうえ、よいお正月をお迎えください。来年も、なにとぞよろしくお願い申しあげます。

光成高志さま

飯田 孝三

## (駄句近作)

尾頭のどつちこち海鼠口つぐむ

煤払ふつくづく御掌御蹊

山茶花の梢日移るばかりなる

(平 21・12・20)

お便り広場 (到着順、敬称略)

白金葎五月号頂きました。毎月すばらしい出来ですね。私は五月〜七月半ばまでひま?のやうです。毎日のんびりでしょう。時折、年のせいで月日を間違へています。京成電鉄本八幡駅のそばに昔からの古本屋があり二回行って昔からの喫茶店によつて帰りました。益々のご発展を祈ります。

(5/25 小山陽也)

白金葎五月号をお届け頂き御礼申しあげます。皆様の作品を拝見し、いつもながらわが身にひきかえ羨ましく勉強させて頂いていきます。我孫子日記を拝見して驚いております。吟行にゆかれる回数が多いこと・尊敬です。私など月に七句でお手上げなのに・恥ずかしい限りです。益々のご活躍をお祈り申上げ 御礼まで申上げます。

(5/26 菊田寛子)

光成様 お久しぶりです。いつも俳誌をお送り下さりありがとうございます。特に今月号の表紙の写真はパンパスグラスのやわ

らかさとバックの緑のコントラストが美しいですね。目の手術の後、風邪をひき一週間こもっており今日やっと多美子さんの声をききました。

(5/31 倉田紀)

子)

P.S いつかいただいたツタンカーメンの豆が曳出しに残っており(食して残り10粒をとっておいたもの)植えました。ただ今20cmにのび楽しみ!ありがとうございました。

前略 先日、炎天寺に問い合わせとところ同封のような返事が来しました。八月15日はお盆の最終日で満員とのこと、他にあいている日が書いてあります。「白金葎」という句会で、田中哲也さんも居たことがあり、代表は光成高志さんと紹介しておきましたので、他の日にもし実行されるならば炎天寺に電話して頂けませんか。なお和尚は秀彦<sup>しゅうげん</sup>といえます。それではまた・草々(平27・6・6増田陽一)

(陽一さんの口利き有難うございました。早速、秀彦和尚に電話いたしましたして八月六日の原爆忌の日にしました。和尚のすすめもあり、西新井大師を吟行して炎天寺に移り句会を致します。西東三鬼、桂信子などの短冊を見せてもらえそうです。案内状は別途発送いたしますのでお待ち下さい。高志)

梅雨入り目前ですが、お忙しくお過ごしのことと思います。

1 五月例会の折に頂いた「築地市場吟行句会報」を拝見し、さすがに粒選りの句揃い、情景が一目目に浮び、つい同行した気分になりました。その一端を別紙の拙稿「吟行句鑑賞」に記しました。ご覧ください。なお、「猫車の唄」は、吟行句報中、敦子さんの「鯉

運ぶ」に悪乗りした、戯れ唄の限りです。

2 「白金葎」50号の一句鑑賞中、高志さんの「蛤や」の記述が散漫でかねて気に入らず、ほぼ全文にわたり手を加えました。併せて、幸一さんの「永き日の」および陽一さんの「蛤の唄」の一部を修正、加筆しました(傍線の箇所)。当方の原稿を直しましたので、今更恐縮ですが、お手許の原版を改め置きいただけたら幸いです(その他は変りありません)。

六月の例会の際、お手渡しするつもりでしたが、随分先になりますので、お送りいたします。記録づくめの異常気象につきです。ご夫妻ともども、呉々も御身(大切に、ご健吟なされますようお祈り申あげます。(平27・06・05 飯田孝三)

(築地市場吟行句会報(二)を発行して参加者にお送りします。その際陽一さんにお世話になった炎天寺吟行日を裏表紙に取り込んで案内することになりました。50号の修正版は右のお言葉通り原版を直すだけにとどめおきます。いずれ5周年記念号で日の目を見るものと思っております。高志)

築地吟行会報(二)頂きました。八月の西新井は欠席させて頂きました。祖父は毎月参詣に行っていました。半夏生も葉先が白くなりました。毎日半分眠りながら駄本を眺めています。世の中にはいぶんいろんな本があるのにビックリしています。益々の御活躍を。

(6・18 小山陽也)

拝復 ご無沙汰致しております。築地市場の吟行会報をお送り頂きありがとうございます。八月の西新井大師の吟行会に参加さ

せていたゞきたくお願い申し上げます。敬具（8・19五十嵐静秋）  
紫陽花が梅雨にぬれ咲き誇っております。先日、築地での吟行  
改めて添削下さり恐縮です。一字で句意が変わりとのこと勉強に  
なります。八月吟行のご案内頂きましたが、旧盆で墓参りなどあり  
ちよつと予定が決まりません。お許し下さいませ。

（6・18 菊田比呂子）

先の例会ではお世話になりました。いつもながら新鮮な野菜を  
戴きました。有り難うございます。築地吟行鑑賞の駄文では、お手  
数をかけてしまいました。皆さんに見ていただけるとは幸いです。  
「ふるさととは大き太陽青い隠元」「明るさの緑透きけりモロッコ隠  
元」定期検診日が決まり、ご送信が遅くなりましたが、以上、六月  
例会句の鑑賞拙稿をお届けします。気象不安定の砌、ご夫妻ともど  
も御身ご大切に精吟下さい。（平51・06・23飯田孝三）

### 受贈誌（H27年6月号）

森青蛙生みたての泡真珠光（彩123号） 平野ひろし  
赤松の幹のあかあか梅雨信濃（〃）  
修学院離宮の景に春田打つ（〃）  
遅日なほ姉・三・六角・蛸・錦（〃）  
運転手スキー積み込む夜行バス（飛行雲75号） 駿河岳水  
三月にはや海開き宮古島（〃） 細川てつや  
五年目の最後借り畑鋏入るる（〃） 和田正清芽  
立ち時柏は枯葉付けしまあすか6月号） 山尾かつひろ

千枚田個個に光りし田水かな（東京クラブ6月） 万世遊  
古畳蠅虎をひとつ置き（〃） 璃子  
迂回路は揚梅みのる遊歩道（〃）  
生徒らの足跡残る千枚田（〃）  
老鶯や風渡りゆく千枚田（〃） 守啓  
こだま

飛行雲75号駿河岳水主宰抜き

初詣がてら七味のやげん堀（白金霞47号） 飯田孝三  
現俳ブログ俳枕 江戸から東京へ（227&228） 山尾かつひろ著  
上野大仏に紅唇木下闇  
街道の神輿の渡御について行く  
飯田孝三  
光成高志

彩123号 平野ひろし主宰抜き

築地市場白子売場の清潔感  
蛤の椀一杯を白くせり  
光成高志  
〃

### 恋の歌を読む

### 武者昭七

片恋 北原白秋  
あかしやの金と銀とがちるぞえな。  
かはたれの秋の光にちるぞえな。  
片恋の薄着のねるのわがうれひ  
「曳船」の水のほとりをゆくころを。  
やはらかな君が吐息のちるぞえな。  
あかしやの金と赤とがちるぞえな。

まず秋の夕日を浴びて散り急ぐまばゆいばかりのアカシアの並木が提示される。「かはたれ」は朝のさだかには見えぬかげをいうのが一般だけれど白秋は好んで夕景に使った。「さしむかいひ二人暮れ行く夏の日のかはたれのそらに桐のにはへる」など。以下「かはたれの秋の光」、

「片恋のうれひ」「水」とそのほたりを行く「曳船」、恋人の「やはらかな吐息」と、主人公の周囲を囲むものはすべて、はかなく過ぎ行くもの、移ろうものの影であり気配である。それは「片恋」のすがたそのものである。

「薄着のねる」の呼覚ますものは我が身を包んでくるしずかなあきらめにも似たやわらかな感情である。それは恋人の漏らす柔らかな吐息とかさなりあう。「片恋」一篇の主題は片恋という痛みさえも甘美な情調としていつくしむ近代の退廃である。ここには激烈な感情の爆発も慟哭もない。静かな嘆きと諦念だけがある。移ろいゆくものはかなげな影、小唄調の物憂げで、けだるげなリズム、ネルの柔らかくやさしい感触、それらがまじりあって片恋の切なさを見事に浮き立たせた象徴詩の傑作である。

# 我孫子日記

\* 五月晴日暈の下の列にある

高志

象の貌怖

いぞ乙巻治

房 館

白金霞 第52号 平成27年6月発行  
編集・発行人 光成高志 (Tel & Fax 04・7187・1068)  
発行所 〒270-1119 我孫子市南新木 2-14-17  
表紙の題字…加納綾女。写真 6月26日の白金霞

5/15	例会
5/20	SOA
5/24	アビスタ
5/26	銀座
5/27	SOA
6/3	SOA
6/4	* 鳥獣戯画展
6/5	「鮎」を見る
6/6~6/7	*2 洒水の滝 & 酒匂川
6/10	SOA
6/16	銀座
6/17	SOA
6/19	例会

飛び込みの戯画の兎の水遊

相撲して勝ちし蛙の大きなこと

\*2 幾筋の縦の水なり瀑布かな

函の中四を待てる鮎かなし

滝の道無人販売実梅あり

釣れてすぐ函鮎とし川泳ぐ

## 編集後記

孝三さんの鑑賞文絶好調です。啓泰さんの御句、田の神の名代たる蟾蜍に挨拶されておられる。昭七さんの御句、忠魂碑の句の陽一さんの鑑賞文にも驚きました。あんな陸軍の歌があったのですね。ひろし先生一行の修学院離宮吟行句を読んで又拝観したくなりました。桂離宮、修学院離宮は田舎少年の憧れでした。その美を賞賛したタウトの旧居が高崎の達磨寺にあるとか、先ず此処から訪ねてみよう。皆さんで吟行がてら訪ねられればと、こんなことを思いながら編集しました。ここでお終いにしようとしたら、松山市から

みち

〃

高志 16

〃

みち

〃



「宿直室は畳八枚花の雨」(みち)が特選になつたと賞品入りのメール便が届いたので敢えて追記しました。